

稱讃 二二四号

二〇二〇年一〇月二日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

慈悲に三縁あり。一つには衆生縁、これ小悲なり。二つには法縁、これ中悲なり。三つには無縁、これ大悲なり。大悲はすなはちこれ出世の善なり。安楽浄土はこの大悲より生ぜざるがゆゑなればなり。ゆゑにこの大悲をいひて浄土の根とす。ゆゑに《出世善根生》といふなり。

『教行信証』 真仏土巻より



仲秋の名月2020年10月1日 鹿児島

最近 THE WALKING DEAD “ザ・ウォーキング・デッド”というアメリカのテレビドラマにはまっています。シーズン二〇ぐらいまであるのですが、まだ半分しか観ていません。

タイトルの通り “歩く死人”、いわゆる“ゾンビ”を退治するだけの話ではないのです。

犯人を追って撃たれ、生死を彷徨って

た警察官の主人公がある日、目を覚ますと、世界は、何かの感染で亡くなつた人が生き返って、生きている人々を襲っていました。

生き返った者は全て、家族や知り合い、愛する人、過去の記憶・情の全てを失い、生きている人や動物の肉に見境なく躊躇することもなく、襲いかかり食らいついでくのです。食われたら最後、腕・足なら直ぐに切り落とせば感染を免れますが、死んでしまい、同じくウォーカー（ゾンビ）と

して彷徨い人を襲うのです。それが、いつの間にか、生きている者全員も感染しており、ウォーカーに食われなくても、怪我、他の病気で亡くなっても、ウォーカーとして生き返るのです。そのウォーカーを動かなくするには、脳みそを撃つか、切り抜くか、潰さない限り、襲ってくるのです。

観て、怖く、気味が悪いのですが、いつもハラハラし、どうなっていくのだろうと、次を見たくなくなってしまいます。

シーズン2か3だったと思いますが、主人公たちのグループが、一件の農家に辿り着きます。最初は、絶対に中に入れさせてくれませんでした。ウォーカーが襲ってくる間に、だんだんと信頼し合うようになります。

多くのウォーカーに襲われている時、その農家の主である老人の一言が印象的でした。『聖書』に記されているのでしょうか。

その老人は、神は、死人が復活すると仰った。まさか、こんな形で・・・とつぶやくのです。キリスト教ではイエスの復活が信仰されているように、死人が蘇ることから、殆ど土葬が行われているようです。ドラマの中でも、愛する者がウォーカーとなり亡くなったら、火葬より土葬を重視しました。

愛する者が息を引き取った時、ウォーカーにならないように、泣き泣き頭を撃つシーンは、こちら涙が出てきます。

キリスト教に限らず、洋の東西を問わず、日本でも、特に愛する人が生き返って欲しいと思うし、生き残って欲しいと思うものです。それが一番の「救い」と思っています。

また、このドラマでは、人間同士の闘いも何度も繰り返されます。

安全な場所を奪い取ろうとされて、闘い相手も殺し、仲間も殺されました。

表面的には、よそ者をウェルカムで受け入れてくれると言うことで、主人公たちのグループも入りました。大歓迎を受けるかと思いや、入ってきた人を食料（大肉）にしてみました。そこでも、仲間を失いますが、主人公たちは闘って死を免れます。

人間が人間を殺す。情を掛けて逃がした者から、また命を狙われる。自分たちが生き残るために、**仕方がない**と思いがながら、これは正しくないとも思っている。人は必ず変わっていくから、殺してはならないと思う人もいる。それは、甘い主人公は言う。主人公はグループのリーダーだが、普通の人である。グループを家族同然に思い、皆が生き残るために、多くのウォーカーを、自分らを脅かす生きている人間を殺す度に、悩み苦しみ、リーダーとして頑張っています。その考えに賛同することもある、仲間の声を聞かず強行することもあり、**落ち着いてくれ**と思わず言いたくなることもありましたが、他の

グループのリーダーとは違うのは、掟やルールで仲間を縛らず、また罰則を与えたりしないところでした。

仏教 **浄土真宗**は、**死人の復活**を説いているのでしょうか。

否、亡くなったら、皆、仏さまに成る」と説いています。

私たちが人をおもう**情**は、小さな慈悲、教えに基づく慈悲は、中ぐらいの慈悲で、この慈悲は人が作る慈悲です。

阿弥陀さまの慈悲は、**大慈悲**と言われる、**無縁の慈悲**と言われる。

何故 **無縁**なのでしょう。

○阿弥陀さまの大慈悲は **無量**である意味の**無**。

○死んだらおしまい」死んだら**無**」と思っている私を対象にして、阿弥陀さまは必ず **仏**にするとのこと **大慈悲**を意味する。

この **ウォーキング・デッド**を観ながら、人間の情の素晴らしさを思うと同時に、どれだけ愛していても、どれだけ救いたいと思ひ、行動しても、人間の慈悲ではどうにもならない。そして、その情は己の都合でしかないことを、訴えているように思えました。

そのことから、**無縁**の**無**とは、人間（私）が為す私の情ではない慈悲だからこそ、**無**と言われるのではないかと思ったことです。

ご紹介

秋のお彼岸の頃、青峰明誓先生からお手紙を賜りました。青峰先生とは十

八年前、ご本山での住職研修会に参加したとき、一緒の班になり、お話をさせていただいた滋賀教区願正寺のご住職です。その時一度しかお会い致しておりませんが、つくづく坊守さんで寺が成り立っていると「思っています」と仰ったことが今も耳元に残っております。

今夏、暑中のお見舞いを申ししたところ、お手紙を頂けるとは、思いも掛けませんでした。お手紙の他に、青峰先生がご自坊のご法要や布教先のご法話で活用される手作りの伝道教材が幾つも入っていました。

その幾つかを紹介させていただきます。八十歳になられる青峰先生の精力的な伝道活動を少しでも見做いたいと思います。





競争社会のただ中で

後藤 法龍 師

ある仏教壮年会の法座の話し合いで、一人の会員の方が次のような発言をされました。お寺の壮年会は本当にいいものですね。初めてあった人でも、すぐに何でも話

ができて、ずっと以前からの友だちだったような気がし、親しみを覚え、人間関係のあたたかさを感じます。同じみ教えに生きるということはどういうことなのでしょうね」と申されました。そしてさらに、それに比べてこの娑婆世界は、まさに競争社会です。職場もそうですよ。食うか食われるか、人づき合いも互いに相手の顔色をうかがい、腹の中を探り合いながら生きていかなければなりません。いつも戦々恐々として、人間関係などは全く冷たいものですよ」と述べられました。

その法座に参加している多くの人は、虚妄なるこの世の在りようにうなづいたことです。考えてみますと、今日の社会は互いに競い合いながら、高度に成長し、発展を遂げてまいりました。そして私たち人間に、多くの利益をもたらしましたことも確かです。しかし一方においては、人間の持つ自己中心的な在り方によって、さまざまな問題や悲劇を引き起こしていることに気

づかずにはおれません。今日の競争原理の社会構造の中で、我さえよければよいといった、自我に執られた自己中心性は、互いに争いあい、きずつけあい、人間同士が不信を増幅しながら生き、さらには、他を支配し、抑圧し、排除することまで及び、それぞれのいのちの尊厳を踏みにじっている事実があることを忘れてはなりません。

十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生なり、すなはちわれらなり。

註釈版聖典六五七頁

と、宗祖親鸞聖人は、阿弥陀如来の無量なる願いは、あらゆる世界のいのちを持ったすべてのものに向けられている。その真っ只中にある自己を、われらといただき、小さい殻に閉じこもるのではなく、さまざまな関係（縁起性）の中にある、開かれた自己を見つめておられます。

また蓮如上人は

南無阿弥陀仏の六字のすがたは、すなはちわれら一切衆生の平等にたすかりつるすがたなりとしらるるなり。

註釈版聖典 二一九六頁

と、お示しくございました。

私たちは十方衆生のまん中に生かされ、

平等のすくいに、つまれて生きることを見失い、自分のいのちを、自分一人の力で生きているように思っています。ともすると自分本位の勝手な価値観により、人々との間に優劣をつけて別紙したり、身内だ他人だといって分け隔てをし、弱気人を軽視したり、男性と女性を比較して差をつけたり、この世は健康者で成り立っていると思つて、体に障害を抱えている人たちを無視したりするならば、私はまさに差別者であります。親鸞聖人は、お正信偈のなかで

弥陀仏の本願念仏は、邪見・憍慢の悪衆生、信樂受持することはなほだもつて難し、難のなかの難これに過ぎたるはなし。

註釈版聖典二〇四頁

と、お示しくございました。

自己中心的な邪見・憍慢の人生は念仏者の歩む道ではありません。私たちは、互いにいのちの尊厳を認め合い高めあい、人間相互の信頼を回復した「御同朋の人生」を親鸞聖人と共に歩みたいものです。

（一九九四年 一月七日）

ひとしづくのことは

親鸞さまと歩む道⑧

『同朋運動法話集三』



秋季彼岸会法要



築地本願寺報恩講



トピック

九月二〇日（廿）、秋季彼岸会法要を行いました。福井さんと中木原さんがご参拝くださいました。

新型コロナウイルス禍の中、お寺に集うことが出来ないところではありますが、ご法事などで、ご家族、近親者の少人数で、稱讃寺にご参拝くださっておられます。

秋季彼岸会の前後、島本家様、早田家様・豊田家様、山下家様・黒滝様、福元家様・松清家様がご参拝くださいました。

また、お彼岸会に参拝できなかったのと、二七日に前田様ご夫妻がお参りにこられました。

そして、二六日には、六町にお住まいの小池様が、初めてご来院くださいました。

当日は、のんのん法話会でしたので、一緒におつとめして、浄土真宗の教えを聞くきっかけをお聴かせいただきました。

新たなご縁をいただき、早く、皆さまともお会いして共に喜びたいと思います。



例年十一月十一日から十六日まで厳修されます。築地本願寺報恩講」でございますが、今年は、新型コロナウイルス禍の中、ご参拝は出来ません。

法要は、僧侶のみで行われ、雅楽もありませんが、築地本願寺 YouTube チャンネルで毎回ライブ発信されます。

築地本願寺のホームページから生の法要をご覧になれますので、左記の日時にアクセスして、オンラインでご参拝してみてください。

記

十一月十一日	廿	一四〇〇・一七〇〇
十二日	月	六三〇・一〇〇〇・一四〇〇・一七〇〇
十三日	火	六三〇・一〇〇〇・一四〇〇・一七〇〇
十四日	水	六三〇・一〇〇〇・一四〇〇・一七〇〇
十五日	木	六三〇・一〇〇〇・一四〇〇・一七〇〇
十六日	金	六三〇・一〇〇〇

通夜布教

十五日（木）～十六日（金）夜間
おそらく十五日午後八時頃からライブ配信されますので、ご聴聞ください。

※報恩講中、帰敬式」が行われますが、東京都のコロナ感染状況により日程等の変更の場合がありますことをご了承のうえ、受式ご希望の方は、稱讃寺までご相談ください。

六月から新型コロナウイルス

感染の予防対策として、シールドを貼ったり、

スリッパへの履き替えにしてみました。

換気がよく出来るようにと思い、換気器具の設置も考えましたが、大がかりになるようではなかった。

開設時からお寺の玄関は鉄扉で、内開きにしてしまいましたが、開放感がありませんでした。また、扉が重たくて、力を入れないと開きません。留守かと思われたこともあり、構想二カ月、鉄扉の外側に軽くて、開放感のある扉を両側から軽く押して開けられる扉を設置することにしました。

材料を集めるのに、いくつかのホームセンターに行きましたが、なかなか見つからず、近くの木材屋さんに行き、サイズ別に注文できました。最初からそうすればよかったと思いました。

夏の期間には間に合いませんでしたが、いくらか風通しが良くなると思います。皆さまのご参拝、心よりお待ち申しあげます。



親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞の生涯とその思想 【二二二二―二二六三】

帰京より入寂まで

六十歳頃に帰京

著述に専心する日々を過ごす

貞永元

（二二二二）年頃、六十歳過ぎに親

鸞は生まれ故郷の京都に戻ったとされる。何歳のときに、なぜ京都に戻ったのか、のちに越後に分かれて暮らしていた妻・恵信尼はいったん京都にも来ていたのか、恵信尼は所領管理のために越後に戻ったとされる、未だ不明な点が多い。六十歳という年齢を考えれば望郷の念に駆られたこともあるだろうが、嘉祿の法難（二二二七年）によって法然の教えは京都で壊滅的な状態にあり、門弟たちがどのような状況にあるのかを見届けたい、法然の教えを自分が正しく伝えたい、という思いが強かったのではないかと考えられる。

というのは、法然の弟子、聖覚が著わした『唯信鈔』をしばしば書写して関東の門弟に送り、建長二（二二五〇）年にはその解説書『

唯信鈔文意』を著わしている。さらに康元元（二二五六）年には法然の法語や消息を写し集めた三巻からなる『西方指南抄』を編纂しているのである。これは法然の言行録としては最古のものといわれ、その精力的な執筆からは師法然への篤い思いが感じ取れる。

弘長二（二二六三）年、親鸞は九十歳の生涯を終えるが、その間、著述活動に専心し、驚くような業績を残している。

『教行信証』を完成させ

湧き出でるかのように「和讃」を詠む

親鸞の代表的な著述といえ、『教行信証』（『顕浄土真実教行証文類』）である。その内容については梯実圓氏の『教行信証と三帖和讃』（五頁）に詳しいが、一説には『教行信証』を完成させるために史料が豊富にそろった京都市に帰ったともいわれ、五十二歳の草稿本来、生涯にわたって推敲を重ね、七十六歳頃に完成させたといわれている。

『教行信証』は全六巻からなるが、その第一巻「教文類」のなかに「阿弥陀仏の本願を説くことを（無量寿経）の要とし、仏の名号をこの経の本質とする」とあり、さらに「大行は無碍光如来 阿弥陀仏」の名号を称えることである」と記している。名号とは菩薩・仏の名前を意味するが、親鸞が経の本質と示す名号とは阿弥陀仏のことで、南無阿弥陀仏の六文

字を六字名号という。浄土真宗では木像よりも絵像、絵像よりも名号」という考え方がいまでも色濃く残るが、この名号を本尊とする考え方は親鸞の発想によるともいわれている。名号について、詳しくは出雲路修氏の「名号とは何か」（次号以降）を参照されたい。

『教行信証』があらゆる経論釈を当たり、引用・分析し、浄土信仰の教義を明らかにした親鸞著述の根本経典とするならば、これを一般民衆のためにやさしく説いたのが「和讃」である。

わごさんえい

和讃とは和語讃詠の略で、漢文の経釈の意味を五七調の日本語の「うた」にしてやさしく表現したものである。平安時代、天台僧の良源や源信なども作っており、鎌倉時代にさらに普及したといわれ、親鸞は生涯に五百首以上の和讃を詠んだといわれている。

その代表的なものが、浄土三部経を中心に阿弥陀仏の浄土を讃じた『浄土和讃』と浄土教の七高僧の業績や著述を讃じた『浄土高僧和讃』、さらに阿弥陀仏の本願は末法の世にあっても真実のさとりを与えると讃じた『正像末和讃』である。

この三部を「三帖和讃」といい、いまも門徒衆の間では日常的に詠われている。和讃の詳しい内容についても梯実圓氏の『教行信証と三帖和讃』を参照されたいが、宗祖の教えが正確に語り継がれているのは、類まれな例といえるだろう。

親鸞が最晩年に到達した

自然法爾の境地

じねんほうに

毎月 親鸞聖人を知ろう」を掲載します

親鸞聖人が生きた時代の社会のあり方などを通して親鸞聖人の生涯を訪ね少しでもその遺徳を感じれたらと思います

顕浄土真実教行証文類 六卷

親鸞の生涯は波乱に満ちていた。なかでも晩年の親鸞にとつてもつとも苦しい出来事は息男、善鸞の義絶であり、在地権力者による弾圧であった。親鸞が帰京後、関東の門弟のあいだでさまざまな疑問が起り、動揺が走る。その最たるものが、悪人こそ救われるのであれば現世で悪行をしてもよいという「造悪無碍」の考え方であった。親鸞はこうした行動を是非するように善鸞を派遣するのだが、地元門弟とのあいだに軋轢が走り、建長四(一二五二)年、善鸞を義絶するに至るのである。その経緯は親鸞の書簡の古写本によってあきらかだが、現在、この書簡が親鸞自身が書いたものか疑問視する説もある。事実とすれば、親子の義絶は苦渋の選択であったに違いない。

親鸞入寂後、直弟子の唯円ゆいえんによる『歎異抄』も、こうした異議を正すために口伝の法語を伝えるために、著わされたといわれている。その内容、構成については佐藤正英氏の『歎異抄』に語られた親鸞おんらん「次号以降」に詳しい。ただ、晩年の親鸞の境地を語る上でもっとも適切で、かつ素晴らしいことばは、正嘉二(一二五八)年、親鸞八十六歳のおり、三条富小路の御坊での法話を高弟、顕智けんちが記した「自然法爾の世界」への到達である。詳しくは浅井成海氏「親鸞の手紙」(次号以降)を参照された。

義なきを義とする(はからいなどない)のが浄土の教えであり、無上仏はかたちもましまさぬゆえに、このうえない仏の世界はすがたかた

ちがないからこそ、自然しぜんなのだ、仏の救済を時空を超えた自然の理ことわりの世界まで高め、あるいは深めている。もがきながらも阿弥陀仏を信じることにかけて親鸞の生涯は、九十歳をもって幕を閉じた。往生の地は弟の尋有じんうの僧坊であったと伝えられる。

.....

「教行信証」と『帖和讃』

きようぎようしんしろう きんじようわさん
―親鸞の主要著作―

梯 実圓氏

師の法然と違って、親鸞には多くの著作がある。その足跡を慕う滅後の弟子にとつて、それはなによりも有難い贈りものである。その表現形式も、漢文あり、和文あり、韻文いんぶんあり散文あり、同じ韻文でも漢文で書かれた漢讃かんさんあり、和文で表わされた和讃あり、まことに多岐にわたっている。さらに著作のほかに、門弟たちに宛てた多くの「消息」や、法語の聞き書きなども大切に伝承されている。しかもそのほとんどが、七十歳を超え、すでに老境に入ってからのものであることを思うにつけ、驚嘆きょうたんとともに「のちは法の宝」ということばがしみじみと思ひ合わされる。

この書は浄土真宗の立教開宗の根本聖典であるといので、宗門内では「御本典」と尊称されてきたが、一般には「教行信証文類」とも、
「教行信証」とも略称されている。著作年時はあきらかではないが、元仁元(一二二四)年、五十二歳頃から書きはじめ、関東在住中、四十二歳から六十二歳前後)にはその原型が成立していたと推定されている。帰洛後、六十三歳頃に原本を清書し、さらに推敲を重ね、尊蓮に書写を許した七十五歳の頃に完成したと考えられる。もっとも細部にわたる推敲は八十歳を超えてからもつづけられていたことが、現存する唯一の自筆本である東本願寺本(板東本)などによって推測することができる。まさに親鸞の後半生の深い宗教経験と、たゆむことのない聞思に導かれた強靱な思索とがこの書に凝集している。

その内容は、「文類」といわれるように、仏祖の経、論、釈の文を、教、行、信、証、真仏土、方便化身土の六項目に分類して引用し、随所に自釈がほどこされている。ところでその引用文には独特の訓点が施されていて、それが自釈と呼応して、引用文が引用文としての枠を超えて、親鸞自身が到達している前人未踏の宗教的世界観が顕あらわれるように著わされている、古今に比類を見ない聖典である。

教文類 教卷」の冒頭に、これからあきらかにする浄土真宗の教義の綱格を標挙して、

謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

（『註釈版聖典』一三五頁）

といわれている。ここでいう「浄土真宗」とは教団の名称ではなく、教法の名称である。すなわち本願力回向と呼ばれる阿弥陀仏の救済活動を浄土真宗と名づけたのである。その本願力のはたらく有様を、往相回向と還相回向に分けて顕わすから「二種の回向」というのである。往相とは、煩惱にまみれた凡夫を救って穢土から浄土へつれて行き、さとりを完成させるから往相というのである。往相として如来より回向される内容が教、行、信、証であるからこれを往相の四法といいならわしている。真実の教によつて行を信じさせ、往生成仏という証果を与えていくからである。還相とは、浄土でさとりを完成したものが、さとりの必然として大悲心を起こし、苦しみ悩む人びとのいる穢土へ還つてきて救いつづけることを表わしている。回向とは、方向を転換して違った方向へ向かうことを意味しているが、いまは「利他回向」のことをいう。利他とは他のものに利益を与えることである。阿弥陀仏は永劫にわたる難行苦行によつて獲得された無量の功德のすべて

を、南無阿弥陀仏という名号に込めて人びとに施し与えて救っていかれるが、その大悲利他のはたらきを本願力回向というのである。このような本願力回向という如来のダイナミックな活動を基軸として、本願の教えを体系的に顕わすのが『教行証文類』である。

さてこの書は真実教、真実行、真実信、真実証、真実土、方便化身土という六卷に分けて法義を展開していく。まず「教文類 教卷」のはじめに、それ真実の教を顕さば、すなはち大無量寿経これなり」（『註釈版聖典』一三五頁）といい、釈尊がこの世に出現された本意を説き顕わされた「真実の教」は大無量寿経」（大経）」であると論定する。その理由は直接的には、大経」の序文に釈尊が、自身を含めて十方の世界に出現するすべての如来は、この大経」を説いて 群萌に真実の利益を恵み与えて拯うためである」と説かれているからだといふのである。さらにその根源をいえば、諸仏に本願の名号を讃嘆させて衆生に聞かせようと誓われた、阿弥陀仏の第十七願力にながされた説法だからであるといわれている。こうして大経」は、阿弥陀仏の選択本願のいわれを詳しく説いて、南無阿弥陀仏という本願の名号が万人平等の往生行として選り定められた経緯を知らせ、人びとを、本願を信じ念仏する行者に育てていく経であったことがわかる。それゆえ真実の行と信はそこから恵まれてくる。

浄土に往生する「行」を顕わす「行文類 行卷」のはじめに、大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり」（『同』一四二頁）といわれている。帰命尽十方無礙光如来 南無阿弥陀仏」と称している称名は、広大無辺な徳をもつ大行であり、真実行であるというのである。

それは称名には、わたしどもの無明煩惱を転換して、涅槃の境地に至らせる徳があるからである。称名は、煩惱具足の凡夫の口から出ているが、凡夫のおこないではなく、わたしの煩惱を転換させようとはたらく如来の本願力の顕現態なのである。それゆえ親鸞は「わかるにこの行は、大悲の願より出でたり」といい切るのである。本願の称名は、わたしの口に現われているが、人間の行為ではなく、阿弥陀仏の大悲の願のはからいによつて顕われ出てきた如来の行為であるといふのである。阿弥陀仏は称名の声となつて煩惱のまっただなかに顕現し、生死に惑うわたしどものこころの闇を破り、往生成仏の志願を満たしていく本願招喚の勅命が響くすがたなのである。要するに称名は凡夫の上に現われた如来のおこないであり、わたしたちに人生の意味と方向を知らせ、人生にまことの実りと安らぎをもたらす「真実の行」であると顕わすのが「行文類」であった。なお「行文類」の最後に行信の徳を讃嘆する「正信念仏偈」（正信偈）」と呼ばれる六十行百二十句の詩偈文）がおかれているがその詳細は省略する。次号につづく

稱讃寺 行事予定

二〇二〇年 十月の行事予定

- 四日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 六日 水 のんのん法話会 午後二時
- 十二日 日曜礼拝 午前九時
- 十六日 金 のんのん法話会 午後二時
- 十八日 日曜礼拝 午前九時
- 二十五日 親鸞聖人を知ろう 午後二時
- 二十六日 月 のんのん法話会 午後二時
- ※「不要不急」の外出は避けください。

二〇二〇年 十一月の行事予定

- 一日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 六日 金 のんのん法話会 午後二時
- 八日 日曜礼拝 午前九時
- 五日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 月 のんのん法話会 午後二時
- 十二日 日曜礼拝 午前九時
- 十六日 木 のんのん法話会 午前九時
- 十九日 日曜礼拝 午前九時
親鸞聖人を知ろう 午後二時

二〇二〇年 十二月の行事予定

- 六日 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 三日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 水 のんのん法話会 午後二時
- 二〇日 親鸞聖人報恩講 午後二時
- 二六日 土 のんのん法話会 午後二時
- 二七日 日曜礼拝 午前九時

編集後記

ザ・ウォーキング・デッド」の続きですが死人が蘇って、生きている人間を無作為に襲いかかるゾンビなんて、フィクションにすぎませんが、政府が崩壊し、経済もなく、生産もなく、教育も、文化も崩壊した世の中に突然なったら、自分はどうするだろうかと思像します。ドラマでは生きていくために、ゾンビを殺していかなければならないと同時に、人間同士の闘いが何度も繰り返されます。仲間を殺されれば、報復し、また敵・仲間が死んでいく。まさに「恨みは恨みしか生まない」。人間を殺めることが正しいことかと葛藤する人びとの場面もありました。生きるために、理不尽な掟に従わざるを得ない多くの人びと。その人たちのために、怒りを抑えて従う主人公。私はそれを視ながら、早く立ち上がれよ！」と無責任につぶやいていました。戦争体験のない私が、戦争資料を読んだり、戦争にまつわるドラマや映画を観ても、その悲惨さを感じます。また、その時代の人びとの生き様が慎ましくたくましく美しくさえ感じることもあります。このドラマは事実ではありませんが、ゾンビより怖いのは、人間であり、戦争や災害等、危機に直面したときの人びとの心の現実を見抜き、私の心の奥底の真実を教えているように思えました。

COVID19に感染することを怖れる私たちですが、より怖いのは、差別をしようとする心であることを見つめたいと思います。自分一人の救いではなく、一切平等こそ本当の救いなのでしょう。願以此功德 平等施 一切 同発菩提心 往生安樂国

二〇二〇年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

おも だお
思い通りにならない

じんせい
のが 人生

二〇二〇年 心のともしび」十月カレンダーより